

## 平成 28 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月

### 1. 学校概要

学校名 名古屋市立 内山小学校

種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育  
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校  
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育  
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ( )

所在地 〒464-0075  
名古屋市千種区内山一丁目 4 番 15 号

E-mail [uchiyaama-e@nagoya-c.ed.jp](mailto:uchiyaama-e@nagoya-c.ed.jp)

Website \_\_\_\_\_

児童生徒数 男子 69 名 女子 58 名 合計 127 名  
 児童・生徒の年齢 6 歳～12 歳

### 2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☒ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☐ 平和・人権
- ☐ 環境
- ☐ 気候変動
- ☐ 生物多様性
- ☐ エネルギー
- ☐ 防災
- ☒ 食育
- ☐ 伝統文化
- ☒ そのほか（体力アップ）

### 3. 活動内容

## 生涯的に自分の健康を考え続け、行動できる児童を目指して

### 1. はじめに

本校の昨年度の児童の運動能力調査では、全国平均と比べると、総合的に、全国平均を下回っている。しかし、休み時間になると外で思いっきり遊ぶ児童が多く、運動好きの児童も多い。ただ、本校は、名古屋市の中でも比較的都市部に位置し、児童の生活環境では、自転車さえ持たない児童もいて、行動範囲が狭い。長い休みには公園で遊んでいる児童をほとんど見掛けないこともある。以上から、児童自身が自分の運動能力を自覚し、目標をもって運動に取り組む姿勢を育むことが、運動能力向上の基礎固めとして必要だと考える。また、ローレル指数の結果から全学年ともに名古屋市の平均を大きく上回っており、「太り気味」の傾向があることが分かった。

一方、食生活については、6年生については、朝ご飯をほとんどの児童は食べて来るが、パンだけ、飲み物だけの児童が90%を占めた。学校での活動はほとんど午前中に行われる。午前中のエネルギーは家庭での朝食に大きく左右されるものと言っても過言ではない。

以上から、学校での教育は学力を支えるだけでなく健康面を支え、体力の育成を図ることこそ、バランスの良い児童の育成につながると考える。また、小学校の内に様々な運動に取り組み、体を動かすことが楽しいと感じることで、生涯を通じて体を動かして健康を保とうとすることにつながる。そこで、以下、本校の児童の健康面を支えるために、体力アップと食育の指導の両面から取り組んだ実践を紹介する。

### 2. 実践

#### (1) 体力アップの実践

高学年の運動能力テストの結果を見ると、バランスが良いとは言えない。

両学年ともに握力、持久力、投球力の課題があることが分かる。そこで、体力を付けるには、筋力、運動のこつ（技能）、持続性の3つの要素が必要だと考えた。そこで、全学年、休み時間に自分で決めた運動を行う「チャレンジサーキット」（筋力、持続性）、さらに、種目別に体力アップを図った企画「縄跳びプロジェクト」「投げようディズ」（技能）を行った。それぞれの取り組みでは、カードを使い、記録をしておくこと、運動の選択肢からその日に自分でチャレンジすることを決めること（持続性）など、児童が主体的に取り組み、運動する気持ちを高める実践となった。

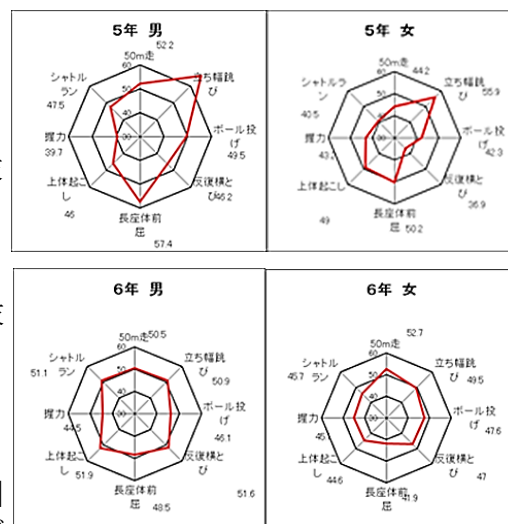
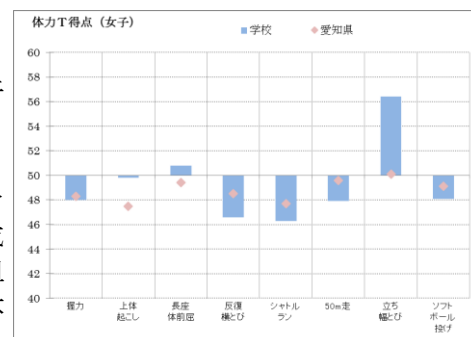
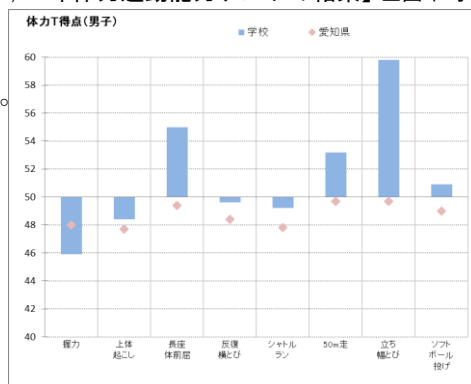
#### ① 「チャレンジサーキット」の取り組み【筋力・持続性】

職員と学生ボランティアが器具を用意したり、それぞれの場所で運動のこつをアドバイスしたりして、児童が運動に取り組みやすくした。縄跳び、跳び箱、マット運動、ボール投げとそれぞれのコーナーで自分のチャレンジしたい運動を行い、できたことを数値で記録していった。このことにより、次の目標が定まったり、友達と競争したりと楽しく運動に取り組んでいた。

#### ② 「投げようディズ」の取り組み：【投球力（技能）のアップ】

委員会の児童が器具を用意したり、投げ方のアドバイスをしたりと取り組み自体を児童が主体的に取り組むようにした。高学年が見本を見せたり、低学年にアドバイス

【5, 6 年体力運動能力テストの結果】全国平均 50



したりと、縦の交流も取り入れながら取り組んだ。「6年生に教えてもらったら、遠くまで投げられた」など、児童の素直な感想が聞かれた点からも効果があったと考える。

### 【体力アップの取り組みの様子】

#### 内山チャレンジャーキット

なわとび (運動場どこでも)  
長なわとび (運動場どこでも)  
スタートはどこからでも  
クライミング(のぼり壁)  
コーンジャンプ (砂場)  
ストラックアウト (きいろマークからサッカーゴールへ)  
なげとキック ※3～6年はTマーク  
てつぼうテクニック

たくさんの児童がチャレンジした様子

縦からも横からも跳べる様に配置を工夫した

学年を超えて自分の力量を決めて挑戦した

### ③ 「縄跳びプロジェクト」の取り組み【跳び続けるこつ（技能）を学び筋力アップ】

縄跳びのプロが児童の前で難しい技を鮮やかに披露するところから始まった。各学年で実践し、学年に合わせてプロに指導していただいた。難しい技でも、基本の跳び方からできていることを知り、グリップの持ち方から、視線など、普段気付かないところを教そわった。ダブルダッチについては、縄に入るタイミングを教わり、高学年の児童が初めて跳べた喜びを友達と分かち合う姿が見られた。縄跳びを個人競技ではなく、集団で作り上げる競技として学んだ。

### ④ 実践の考察

単発の運動では、体力アップにはつながらない。持続的に運動していく事が重要だ。

そこで、短期間で「できた」という達成感を味わうことで、続けたいという次への意欲につなげていけると考えた。手立てとして、「カードに自分の達成記録を書くこと」「仲の良い友達同士でできること」の要素を取り入れ、個の運動を協働と結び付けて体力アップを図る取り組みを行った。これらの活動を発展させ、さらに、児童の主体性を伸ばしていくために、たてわり活動（学年間の横断的なグループ活動）で、各グループで、何らかのスポーツに取り組む実践「スポレク活動」も行っている。これも児童の自主性を育て、楽しく体力アップを行っていく上で効果的だと考える。

### (2) 食育の指導 ～食育の輪をつなげよう～

6年生の朝食の実態を調査すると、全員が朝食を食べていたが、その特徴として、パンがご飯より圧倒的に多かった。パン食の児童は、パンと飲み物と2品の児童が85%と多く、チーズやチョコレートの入ったパンを食べていることが分かった。そこで、6年生には、家庭科の学習を通してバランスの良い朝食を考える実践を行った。また、学校全体の取り組みとして、給食を残さず食べる取り組みと、現3年生が2年生時から行っている食育の経年的な取り組みも紹介する。

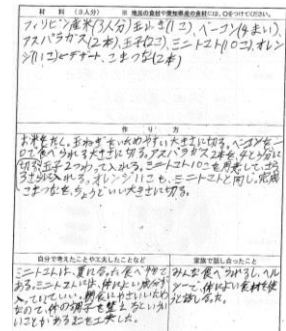
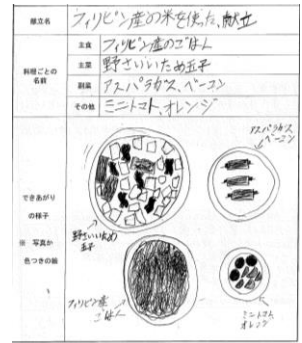




## ① 朝ご飯を見直そう

6年生の朝ご飯の実態は、パン食が多かった。1年前、伝統食としてご飯と味噌汁の学習を行った。ご飯食のよさを「お米マイスター」に話していただいて、米食のよさを学んだ。また、みそ工場の見学を通して、みそ汁の栄養について学んだ。その当時は、米食の朝ご飯にしていた児童が増えていた。しかし、1年後、もとの実態に戻ってしまった。このことから、児童が家族に米食の良さを訴えてもなかなか家族を持続的に動かす事はできなかった。どうにかして、児童を通してこの事態を打破できないか。6年生の家庭科では、食事のバランスを考える学習がある。

そこで、1年間調理の基礎を学んでいるので、夏休みの前に「家族に作ろう、おいしい朝ご飯」というめあてで献立作りを行い、実際に家族に作るというテーマで実践した。栄養バランスの表から、献立の組み合わせを考える学習を行った後、自分の家族に食べてもらう朝食の献立作りへとつなげていった。児童は、それぞれの家族の好みやバランスを考えて献立作りをした。米食の献立を考えた児童は、96%だった。栄養バランスを考えると、米食の方が良いことを児童自身が感じた結果だった。右の献立を作った児童の保護者は、「子どもが作ってくれた朝食から、バランスが必要なことに気付かされました。子どもに教えてもらいました」という感想が書かれていた。

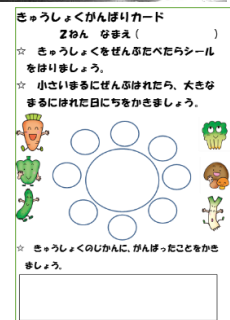


## ② 食育キャンペーン

委員会の児童が返却された食器や残量を調べ、その結果を基に「きれいに食べよう」「給食がんばりカード」「元気のためにもう一口」というキャンペーン活動を行い、それぞれの学級に普及活動を行った。給食の残量の特徴として、米飯の残量がやや多く、おかずでは、ゆでキャベツやコールスローなどの野菜が多く残った。これは、野菜の必要性を知らせたり、ごはんとおかずを上手に組み合わせることで食べるマナーを指導したりすることが必要だと考えた。



また、右の給食がんばりカードで自分自身が食を見直す工夫と意欲付けを行った。調理所に「今日は残量ゼロです」とうれしそうに報告しながら返却する学級も出てきた。キャンペーン後も学校全体の取り組みとして定着している。



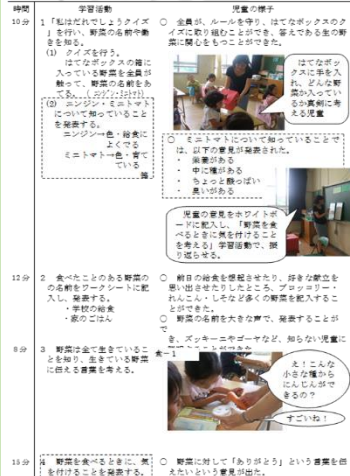
【完食したらシールを貼るカード】

## ③ 食育の経年的な取り組み

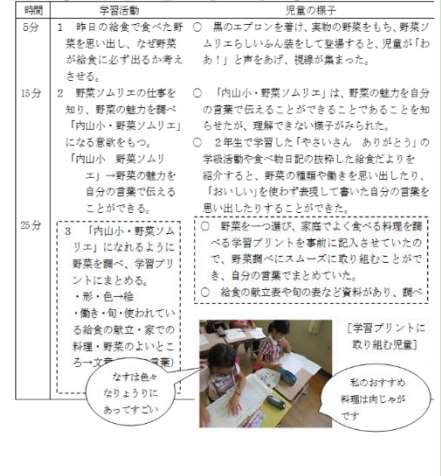
給食では、野菜の使用度が多い。時には家族が好まないという理由で、家庭であまり食されていない野菜も出てくる。

そこで、給食が嫌いにならないように、2年生から3年生に食育を行っている。2年生では、野菜の気持ちを言葉に表したり、食べものの日記を書いたりして、食に関心をもたせた。その際「おいしい」というひとくくりの言葉は使わず、細かい味の表現をするようにさせた。3年生では、実際に家庭や給食で調理された中にある野菜の働きについて学び、野菜の栄養が健康を育むことになることを学んだ。この2年間の学習により、献立表の食材の部分を見る

## 同じ児童での経年的な取り組み



2年生: やさいさんありがとう

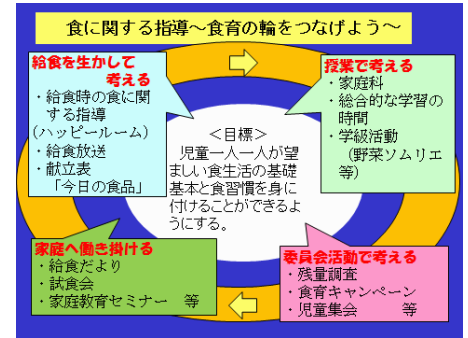


3年生: 野菜ソムリエになろう

児童が増え、実際の給食の中から探すようになった。野菜に興味をもち、給食はいつも残さずに食べる学年になっている。

#### ④ 実践の考察

食育については、学校と家庭を連携した輪が繋がらないと食育として片手落ちになる。そこで、右のような「食育の輪をつなげよう」というテーマの取り組みで行っている。給食の食材に興味をもつことで好き嫌いがなくなっていくのは、成果といえる。また、食材の命に感謝することが、米粒1つ付いていないきれいな食器で返却することを心掛けたり姿勢を正しくして食べるたりする食事のマナーにまで、自然につながったことも成果といえる。



6年生の取り組みについては、6つの食品群を見ながら献立を考え、それを家族と共にやる事で、家庭への啓蒙にもつながっていったのは、大きな成果だと考える。右の様に、食事を作る家族自身が、「学んでいきたい」と考えるようになったことは、児童の健康維持に持続的に寄与することになっていると考える。

#### 3. おわりに

児童の自主性を伸ばしながら、体力アップを図る取り組みの1つとして、自由に遊び道具が使えるように「エンジョイボックス」を設置した。縄跳び、ボール、ドッチビーなどの遊び道具を自由に持ち出して使って遊んでいる。初めは、「エンジョイボックスの道具を使っていますか?」と聞きに来ていたが、今では自由に自分たちで開け閉めして道具を使い、外で思い切り遊んでいる。また、雨の日は、学年毎に時間を設定して、体育館を開放し、雨の日でも体を動かす取り組みを行っている。学年を色分けして、使用できる学年の旗を児童の見える所に差しおくと、自然に体育館に集まり遊ぶようになった。このように常に体を動かす習慣付けは、体力アップの効果だけではなく、学級で誘い合ってみんなで遊ぶ事で、結束が強くなった。また、学年の枠を超えて取り組んだ「スポレク活動」などで、児童が様々な仲間と体を動かす機会を経験したことで、時、場、仲間を自由自在に自分の意志で変えながら楽しく体を動かしている。このことで、教室で休み時間過ごす児童がに減ったのも効果として受け止めた。

自分で考えたことや工夫したことなど	家族で話し合ったこと
ほとんど"の料理に、愛知県産の食材を入れました。そして、6つの食品群を見ながら、できるだけ栄養のかたよらないようにしました。	栄養 バランス かたよらない朝ごはんをてきとうに作れるようにしたいこと
保護者からのメッセージ (朝ごはんへの思いや感想、お子さんに伝えたいことなど)	
一日のスタートが 朝ごはんから (まじまじで) 毎日のメッセージ、ちゃんと作る 毎日子供が元気で、いらねえよ 準備はばいも、勉強したい、子供には 朝ごはんを ちゃんと食べて、やるべし 朝ごはんも/食べ (はい)です。	

我が家の大人はメニューで、野菜もいっぱい摂れて体もあつたよ。朝ごはんが大事。1日家の味として引き継いでもらいたいこと。

朝ごはんは、大人になった時、家族の良い思い出になります。次の世代にもつなげる朝ごはんが出るといいですね。

【家族のあり方と食の関係を述べた保護者の感想】

また、食育の面では、朝ご飯の取り組み後、毎朝、家族のために朝ご飯を作るようになった児童が出てきた。「毎朝、卵料理を工夫して作っているのには、感心します。」と保護者からうれしい感想も寄せられた。また、「朝ごはんは、お弁当の残りが多く、バランスを考えていませんでした。」という保護者の感想からも、家庭と共に食育を考えていく大切さを改めて感じた。さらに、「家族の味」「家族の思い出」「次世代に伝える」などの重要なキーワードが書かれている以下の2つの感想から、食事は家族のあり方そのもので、家族と切り離して考えてはいけない事が分かる。食事が家族のあり方を表象すると言っても過言ではない。ますます社会環境が複雑になっていくことが予想される中で、確固たるものとして、家庭が有り続け、絆を深めていく食があることを感じながら、学校現場で生かしていかなければならないと強く思う。

## 進んで英語で話し掛ける子どもを目指して

はじめに

加速するグローバル化の進展を見越して中教審では、現在、小学校の高学年で行われている外国語活動を英語教育として教科化し、時間数も35時間から70時間に増やすと発表した。小学校においては、体験的な理解・コミュニケーションを図ろうとする態度の育成・外国語に慣れ親しませるという目標から、さらに、技能を活用しながらよりコミュニケーションを深めることが求められることになった。現在名古屋市では、外国語活動アシスタント（以下外アシ）という日本人の専門家と担任と一緒に授業を行っているが、担任自体が話す・聞く・読む・書くなどの技能を活用したコミュニケーション能力を深め、児童が主体的に学ぶアクティブラーニングの手法を取り入れた学習内容を考えていく必要がある。そこで、指導要領に根ざした英語教育に向かう姿として、本年度取り組んだ実践を以下、報告したい。

### 1. 実践報告

#### （1）児童の実態に基づく授業実践年間カリキュラムの作成

##### ① 5・6年生の児童の実態

4月、5年生・6年生に外国から転入生（5年A児、6年B児）があった。5年生は、仲良くなりたくて、身振り手振りで話し掛けていたが、A児に質問されると、戸惑っていた。一方、昨年度の外国語活動では86%が英語は楽しいと答えていた6年生は、B児に身振り手振りで話し掛けてはいたが、コミュニケーションツールとして英語を学習しているにも関わらず「通じるかどうか自信がない」という理由で、英語を使っていなかった。

##### ④ 学習経験に基づく「コミュニケーションを図る態度」の目標設定

英語に初めて取り組む5年生は、『英語を話したい』意欲、2年目の学習者である6年生には、自ら課題を見付けながら学ぶ『英語を学びたい』意欲を育むことを学年の目標に設定した。その意欲に基づいてそれぞれの学年に相応した「話し掛けたい」「聞き取りたい」「書いて伝えたい」というコミュニケーションを図る技能を3つに分け、段階的に積み上げていくカリキュラムを作成した。さらに、児童が英語への取り掛かりのしやすさと有用性を感じてほしいため、他教科との関わりをもたせた授業計画を立てた。

##### ⑤ 学習の主な手法

児童が学んできたことを生かす場として、学期ごとに英語で外国人に伝える体験を取り入れた。そこで、外国人に英語で実際に伝える体験を積むことで自信をもたせ、間違いを恐れず積極的に英語を使おうとする児童にしたい。また、各実践では（意欲を高め）→（学ぶ）→（生かす）→（次への意欲を高める）の流れでテーマに沿った学習を進め、各実践で児童が主体的に学ぶことができたかを確認できる評価基準を定めた実践計画を以下のように立てた。



育てる 態度	5 年 高めていく意欲「英語を話したい!」		6 年 高めていく意欲「英語を学びたい!」	
	実践内容	評価基準	実践内容	評価基準
一学期 〔話し掛けたい〕	1 学期のテーマ：日本のよさを伝えよう			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○日本の和食を伝えよう</li> <li>・外国人に自分の好きな和食の味や作り方を伝える</li> <li>・外国人と一緒に調理実習を行って作り方を伝える【家庭科と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだ和食のよさを伝える表現を使うことができる（表現）</li> <li>・調理しながら、相手の様子を見て作り方を教えることができる（態度・表現）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○伝統の遊びを伝えよう</li> <li>・コマや折り紙などの日本古来の遊び方の英語表現を知る</li> <li>・友達同士で英語で教え合う</li> <li>・外国人と一緒に遊んで交流する【社会科の学習と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分かりやすい英語表現で遊び方のこつを伝えることができる。（表現）</li> <li>・相手の表情を見ながら伝えことができる（態度）</li> <li>・一緒に行うよさを感じる（態度）</li> </ul>
二学期 〔聞き取りたい〕	2 学期のテーマ：日本の国土や名所を紹介しよう			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○国土の紹介をしよう</li> <li>・紹介表現を知る</li> <li>・友達同士で紹介し合う</li> <li>・社会科で学んだ日本の国土を外国人に紹介する【社会科と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・紹介表現を使って、人、物、場所の紹介活動を行うことができる（表現）</li> <li>・紹介する目的、聞き手の表情を見ながら紹介できる（態度）</li> <li>・質問を聞き取ろうとする（態度）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○京都と奈良を紹介しよう</li> <li>・道案内の表現を知る</li> <li>・道案内を地図上で行う</li> <li>・実際に校内を歩いて道案内する</li> <li>・外国人に京都と奈良の観光案内を行う【修学旅行と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・道案内の表現通りに地図上の位置が分かる（理解）</li> <li>・道案内通りに体を動かせる（理解）</li> <li>・修学旅行の感動を英語で友だち同士で伝え合うことができる（表現）</li> <li>・外国人に観光案内ができる（態度）</li> </ul>
三学期 〔書いて伝えたい〕	3 学期のテーマ：交流活動しよう			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○お礼のカードを書こう</li> <li>・簡単な英語のメッセージの書き方を知る</li> <li>・今まで来てくださった外国人にお礼のメッセージを書く【図画工作科と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メッセージの表現を知り、書こうとする（意欲）</li> <li>・友達にメッセージを書くことができる（表現）</li> <li>・外国人にカードを書くことができる（表現）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○英語劇を作ろう</li> <li>・昔話の英語のせりふを聞きとる</li> <li>・登場人物の気持ちを考えて短い英語でせりふを加え、劇を作る</li> <li>・外国人に観てもらい交流する【国語科と関連】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔話を聞き取りながら、内容を想像できる（表現）</li> <li>・登場人物の気持ちを考えてせりふを考えることができる（表現）</li> <li>・せりふを覚えて劇を行うことができる（表現）</li> </ul>

## （２）アクティブラーニングを生かした授業実践

### ① 家庭科を活用した 5 年生の実践「話し掛けたい態度を育む」

〔意欲を高める〕 外国人に伝えたいことを話し合う中で、ユネスコ文化遺産の和食から、5 年生の家庭科領域であるご飯とみそ汁作りを外国人と一緒に取り組みたいという希望が多かった。そこで、調理実習も初めての 5 年生で、調理を英語で教えられるか不安があったが、児童の意欲を優先して実施することにした。

〔学ぶ〕 和食の紹介活動と調理実習を行うことになった。外アシの英訳のもと、選んだ和食の紹介文を児童自ら読む練習を行った。また、日本語で調理手順を言いながら練習し、それを英語で言えるまで練習した。また児童の要望もあり、いつでも表現を確認できるよう廊下に英文を掲示した。児童は、休み時間に友達と確認し合ったり、当日まで独り言のように英語を唱えたりするなど熱心に練習し、意欲も高まった。A 児と何度も発音を練習するなど、A 児と関わる児童が増えて、遠慮がちだった A 児が学級に一気に溶け込んでいった。英語の話せる A 児は羨望の的になり、学習以外に進んで英語を教えてもらおう児童が多かった。

〔生かす〕 6 月下旬に名古屋市立大学の留学生 4 名を迎えた。和食の紹介では、留学生が大いに興味を示し、「食べてみたい」「自分の国にも似た食べ物がある」などの反応や「何でできているの」などの質問

は、練習の成果が出て英語が相手に伝わっているという児童の確信となった。このことは、相手の目をしっかり見て返事をする様子からうかがえた。ところが調理実習では、調理に必死になって留学生に教えるどころではなくなってしまった。その様子を見かねた留学生が英語で児童に話し掛けていた。児童は質問に対して英語で答えられないと、身振り手振りで



なんとか伝えようとしていた。そのやりとりが各調理台で見られるようになり、必死に調理していた児童の心にゆとりができ、次第に調理の英語表現を使い出した。食事中も、学んだ英語で積極的に話し掛けるまでになり、各テーブルで児童と留学生の笑顔が見られた。

[次への意欲]「調理実習の途中からめらめらと英語で伝えたい気持ちになってきた」と話すC児。4月当初、「英語が話せないからAさんに話し掛けない」と言っていたC児からは全く想像ができない姿だった。実践後に英語を話すことに自信がもてた児童は、5年生全体で80%以上になった。これは調理の言葉が短く、覚えやすい英語表現だったことにある。また一緒に調理することで、相手の調理の仕方から自分の英語が通じたことが即座に確認でき、**英語で伝えることの手応え**と**相手の反応**を実感しやすかったからだと考える。実際に外国人に英語を使ってみることで、今度は**質問を聞き取りたい**意欲を次の実践につなげていった。

## ② 社会科を活用した5年生の実践「聞き取りたい」態度

[意欲を高める] 外国人にもっと日本を知ってもらいたいという児童の気持ちから、社会科で学んだ国土の学習を生かすことにした。学んだことならば知識があり、外国人の質問に答えられたという前回の課題も克服できる。そこで、学習したり、親戚が居住していたり、旅行したりした知識のある地域をさらに、教科書や資料集、家族に聞いて情報を集めた。また何回も発表できるようにポスターセッション形式の発表を行うことにした。

[学ぶ] 紹介と相手の質問を聞き取るために、Whatとlikeを使い、好きな色や食べ物を尋ねて情報を集める練習と、相手の質問を聞き取って答える練習を行った。丸ごと覚えた一文で友達や家族の紹介をする児童もいたが、友達の紹介文のよいと思った単語や表現を即興で自分の紹介に取り入れて紹介するなど、自ら学び取る児童も出てきた。

[生かす] 11月下旬、名古屋市立大学の留学生5名を迎えた。児童は地域の特徴や自分の思いを交えて紹介した。原稿を覚えてきた児童も多く、留学生の反応を見ながら紹介した。繰り返し紹介する



中で緊張感も解け、今まで学習した表現「What・How・Do you〜?」を使って好きな物などを質問し、会話を広げた児童もいた。

[次への意欲] 留学生の英語の質問が「なんとなく分かった」と答えた児童は83%いた。社会科で既に学習していたので取り組みやすく、質問の予想も立てやすかったために、前実践よりも英語を聞く余裕が生まれたからだだった。このことは、留学生と心が通じたと感じ、発音の美しさに気付き、留学生の母国への興味関心を高めることにつながった。

## ⑥ 社会科を活用した6年生の実践「話し掛けたい態度を育む」

[意欲を高める] 転入したB児は日本語が全く話せないため、あまり学級の児童とは交流できなかったが、児童は仲良くしたい気持ちが強く、外国語活動で一緒に活動できそうなことを学級で話し合った。B児がこまに興味をもっていること



をヒントに、外国人も呼んでB児と共に3年の社会で学んだ昔の遊びを教えることと和太鼓を披露することになった。

〔学ぶ〕こま、折り紙など、これらを初めて目にする外国人が遊び方を理解できる説明をグループで話し合った。さらに、一緒に遊ぶためにゲーム形式にして、ルールも作った。羽を落としたら顔にシールを貼る羽つきや色ごとに点数を変えたたるま落としなど、それぞれに楽しく遊ぶ工夫をしていた。また、どのタイミングで何を伝えるかなど、細かい説明の手順もグループで話し合った。外アシに英訳してもらった手順や遊び

方の説明文は、どれもが長い英文になった。多くの児童が困惑顔で外アシの周りに集まり、発音を何度も聞いていた。確かに分かりやすく教えるためには、丁寧な説明が必要だった。

原稿を読む練習をしていた児童が「こうやって遊びを見せながら教えればいいよ」「ほらUp and down」B児がその言葉に合わせてお手玉をしている。確かに動作を見せながら“Look at this”と言え、長い英文の説明はいらない。簡単な英語を使いこなすことこそ大切だと児童自身が気付いた。動かしながら英語で説明すると、B児は動きをまねながら“turn round”など独り言をつぶやいていた。そのつぶやきを説明に取り入れた。また、相手の表情を確認しながら説明するとよいこともB児に教えたことで気付くことができた。“I got it”とB児から言われると、児童は安心した。またB児もこの活動を通して、学級の児童と話すことができるようになり、学級に溶け込んで、休み時間には一緒に遊んでいた。

〔生かす〕7月上旬、名古屋市立大学の留学生5名を迎えた。留学生は、児童の考えた遊びのルールに従って遊んでいた。4月には英語が分からないから嫌いと言っていた児童が「英語でこっちに来てくださって言いたい」と進んで関わろうとする児童や「こまに興味をもってくれた」と相手の反応を見て喜ぶ児童がいた。熱心に取り組む留学生の姿に、もっと教えたいという児童の気持ちが高まり、他の技も教えるなど予定外のことも行ったり、竹とんぼの飛ぶ様子を留学生がfly awayと言った一言を聞き逃さずに「竹とんぼfly away.」と次の説明で使ったりしていた。太鼓の演奏を披露した後、留学生を自然に誘って、ばちの持ち方、リズムの取り方を身振り手振りで教えていた。太鼓の演奏には全員が自信をもっていたとはいえ、進んで太鼓を英語で教えるとは思っていなかった。太鼓演奏の後の「Bさんと心が通じた気がした」という児童の発言は、言葉を越えて心が通じ合ったことを実感したからこそだと考える。

〔次への意欲〕児童に伝えたい思いが強かったのは、自分たちでルールを決めたこと、自信をもって取り組めた題材だったことにある。予定外のことを教えたことも、B児とのやりとりで短く分かりやすい伝え方を自分たちで学び取り、それを実際に使えたことで英語に自信が付いてきたからであり、グループで助け合いながら活動できたことも心強かったと考える。また、外国人と一緒に→相手の反応が見られる→心の交流が育まれる→話し掛けたい気持ちが高まるという構造があった。しかし、児童自身が英語力不足を実感し、聞き取る力、正しく発音する力、単語力と具体的に必要なことを挙げた。相手の言葉を聞き取って、続けて会話がしたいという次への意欲をもつことができた。

日本語で説明の仕方を考える

自分たちで遊びながらどんな説明をすればよいか話し合う

英語の表現を学ぶ

外アシに説明の英訳をもらい発音の仕方など教えてもらう

友達同士言えるかどうか確認し合う

英語で通じるか予行練習を行う

B児が説明が英語の理解できるか確かめる

外国人に昔の遊びを伝える



## ⑦ 修学旅行を活用した6年生の実践〔聞き取りたい〕態度

〔意欲を高める〕実際に目で見て体験してきたことは情景も思い出すことができる。英語が苦手と言っていたE児が「京都に外国人がたくさんいて、話し掛けたかった」と発言した。京都が世界中で訪れたい町第1位という情報から「外国人に修学旅行で行った京都と奈良を紹介したい」という児童の思いが高まった。また、地図を見ながら迷っている外国人がいたという児童の話から「道案内の仕方も知りたい」という要望が出た。そこで、修学旅行で訪れた京都・奈良の観光案内を外国人に行くことを目標にした。

〔学ぶ〕道案内に必要な言葉を児童が挙げ、外アシが英訳する方法で学習した。「go straight、turn、corner、right、left」どの英単語も児童は聞いたことがあったが、外アシの指示に従って体の向きを変える練習では、左右でさえ間違える児童が多かった。実際に体を動かして英語を児童自身が発音することで確実に英語を覚えていった。さらに、場所を示す単語を児童が外アシに尋ねながら語彙を増やしていった。「横断歩道や信号も知りたい」児童は自分の町で道案内をすることまで発想を広げて、知りたい言葉を次々に挙げていった。外来語になっている単語もあるが、何気なく使っている片仮名用語には、英語ではないものがあることも分かった。スーパーはすごいという意味、薬局はファーマシーといい、ドラッグは悪い薬の意味、交番は日本だけのものなど、外国との文化の違いも学んでいった。

次に外アシの英語を聞きながら、地図上で正確に動く練習をした。白地図上で外アシの指示通りの道順で進みながら、どこにどんな建物があるのかを書き込んだ。何度も道を変えたり、曲がる回数を増やしたりと、児童の理解度を図りながら英語での表現方法を増やした。さらに完成した地図を基に、今度は児童同士で道案内を行った。児童は友達の指示通りにたどり着けないと悔しがり、何度も挑戦する姿が見られ、意欲的に取り組んでいた。

〔生かす〕12月上旬、名古屋市立大学の留学生10名を迎えた。担当する留学生と観光案内で巡る8か所の順番を相談し、1人が道案内、もう1人は態度と表現の評価者となり、役割を途中で交代して、二人一組で出発した。各部屋に貼ってある写真の場所を紹介し、留学生と相談してポーズを決めて記念写真を撮った。児童は単独で道案内を行わなければならない状況でも落ち着いて楽しそうに活動していた。

〔次の意欲を高める〕前の実践より学習したことが使えた児童が65%いた。これは段階を追って道案内の表現を確実に身に付けたこと、自ら必要だと考えて学び取った単語を使ったこと、さらに修学旅行先の京都と奈良のよさを伝えたいという思いが強くあったからだ考える。外国人と2人で楽しく話しながら案内していたが、自身の聞き取る力はまだ足りないと感じていた。しかし、前回より伝える力が付いたと感じた児童が13%増えた。

## 2. おわりに

両学年共に「英語が書けるとかっこいい」という理由で、これまでの実践の中で進んで英語を調べて単語を書いてくる児童がおよそ40%にのぼり、文部科学省の目指す「書く」態度の育成に結び付いている。また、本実践に取り組む前に中学校の英語を参観して、学習の進め方を話し合った。例えば、中学校では、三人称単数などの動詞の変化は、文法の中で理解させているが、小学校では、理屈ぬ



児童が学校での学習を発展させて家庭でも英語で話したり書いたりしている。これは、「自信をもって英語を使えたこと」「実践の中でコミュニケーションのよさを学んだこと」にあると考える。外国語学習を教科の中に溶け込ませていくことで、グローバルな視点に立って各教科を見直していく視点にもなると考える。

☒ 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）  
☐ 時間外活動の時間を使用  
☐ ユネスコクラブの活動として実施  
☐ その他（ ）